俺の身代わり募集中。

彼岸花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺の身代わり募集中。

【Ｎコード】
Ｎ２９２０ＢＡ

【作者名】
彼岸花

【あらすじ】
公爵家の次男、フランが、大っきらいな面倒ごとを回避しようとする話。
主人公はチートですが、面倒事が嫌いなため、滅多に実力を出しません。
基本猫被りで軽いシスコンですが、面倒事を毎回起こす人（主に兄）には全く容赦がありません（笑）※戦闘要素はいずれ入れようかと思います。

糞兄貴に黙祷を捧げよう。（前書き）

息抜きの作品です。
コメディを目指していますが、作者のツボがおかしいので、笑えないところもあるかもしれませんが、よろしくお願いします。

糞兄貴に黙祷を捧げよう。

フカフカで天蓋付きなキングサイズのベッドに、少女と見紛う様な少年が、死んだように眠っていた。
黒くてツヤのある長くてサラサラな髪。華奢な体つき。パーツが整った小さい顔。キメが細かく張りのある白い肌。その全てが、彼、フランを少年ではなく、少女と認識させる。

外はまだ陽が昇り始めた時間。
サテン生地のカーテンの隙間から、陽の光が差し込んでくる。
屋敷の人達は、使用人以外起きていない。

「おぉ～兄ぃ～様ぁ～～～～！！！！！」

バアアアアアアアアアアアアアン！！！！！！！

そんな叫び声と共に、フランの部屋の扉が、盛大な音を立てて開かれた。
その音に強制的に起こされたフランが見たのは、自分の部屋にズカズカ入ってくる、妹のメイシャだった。

「フランお兄様っ！！エヴァンお兄様がぁ～！！」

まだベッドの上にいるフランの所に駆け寄ると、メイシャは泣き崩れた。
何も話さない妹を落ち着かせると、フランは、テーブルの上に紅茶を用意し、メイシャに勧めた。
様子を伺いながら、状況を把握しようとする。

「メイシャ。エヴァン兄さんがどうかしたのか？」
感情の起伏が激しい妹を、刺激しないよう慎重に聞いた。
このやり取りには慣れたものだと自分でも思う。
まあ、ほぼ毎日やっている事なのだから、慣れて当たり前か、と軽く自嘲。

「エヴァンお兄様が、私の大切にしていた熊のぬいぐるみを、私の許可もなしに勝手に処分されたのですわっ！！」
大切にしていた熊のぬいぐるみとは、幼馴染から貰ったというあれだろうか？とフランが推測していると、妹がまた声を荒げた。

「大体、クゥがくれたぬいぐるみを、公爵家の者がこんな汚いものを持って恥ずかしくないのかっ！とか言って捨てたのですよ！？本当にありえません！！クゥが平民だからといって汚いとはっ！！これは歴（れっき）とした差別です。彼への冒涜です！！そういう差別をするあなたが人間としてどうなのですかっ！？人間性に問題のあるあなたにクゥを汚されたくありません！！」
最後はココにはいないエヴァン兄さんの悪口になっていた。
二人称がエヴァンのことだということは分かるのに、なぜか自分に言われているようで、萎縮してしまう。

メイシャはというと、言い終わってスッキリしたのか、顔には清々しいと書かれている気がするくらいに、さっきまでの剣呑な雰囲気が無くなっていた。

「フランお兄様もそう思いますよねっ！？」

フランが呆然としているところに、メイシャがキラッキラな笑顔を向けて問いかけてきた。

「そうだね。これはどう考えても、エヴァン兄さんが悪い。」

「そうでしょう！？」

フランが肯定の意を表すと、やっぱりフランお兄様は頼りになるっ！、とばかりにメイシャは目を輝かせた。

「公爵家の時期当主となる人が、平民だからと差別をしてはいけない。それはいずれ、町民の反乱という形で返ってくるだろう。そこはこれから直していかないとなぁ。

・・・・・！そうだっ！！父様に頼んで、俺がエヴァン兄さんを調ｋｙ・・矯正させようか・・・・」

最後の方は声が小さくて、メイシャには聞き取れ無かったが

「それに、メイシャを泣かせたことが何よりも許せないしな。」

その一言を聞いて益々メイシャはフランが好きになった。

紅茶を飲み終わると、メイシャは、笑顔で部屋に戻っていった。

メイシャが、自分の部屋から出ていったところで、フランは再びベッドに横になった。

フランの目は、さっきの妹思いな優しさとは打って変わって、鋭い光を宿していた。
窓の外に目を向けながら、周りに聞こえないように叫ぶ。

「あ”ぁ”～あぁ～あああああああああぁぁぁぁ～～～～！！
糞兄貴がっ！！
面倒事増やしやがって！！
やっぱ、調教し直さなきゃかなぁ・・・・・・

いや、それこそ面倒だし・・・・
でも・・・まて、ここで奴を大人しくさせておいたほうが、今後の面倒ごとが減るか？」

不吉なことを呟いた。

もし、使用人が聴いていたら、間違いなくエヴァンに黙祷をしただろう。

糞兄貴に黙祷を捧げよう。（後書き）

誤字・脱字などがあれば、指摘していただければ幸いです。

結婚は人生の墓場らしい。（前書き）

ちょっと楽しくなったので、また続き書いてみました。
あんまり話進んでないです・・・。

結婚は人生の墓場らしい。

フランは、公爵家現当主、つまりは父様の執務室に来ていた。
もちろん、この前の件を父様に進言するためである。

今は、執務用机で向き合って座っている。

「――という訳で、兄さんの教育がなっていないと、俺は判断しました。」
「エヴァンがそんなことを言ったのか・・・・・・・・・。」

今朝あった事を事細かに報告すると、父様は眉根に皺を寄せた。

「だから俺に、エヴァン兄さんの性格の矯正を任せてもらえないかという、相談なのですが・・・。」
「しかし、数年前にエヴァンをフランに任せた・・・それでも治っていないのだが・・・。
しかも、あの時のエヴァンの怯え様は普通じゃなかった。

フランはエヴァンに何をしたんだ?」

「何をしたって大袈裟な・・・。
俺はエヴァン兄さんに、世間っていうものを教えてあげただけですよ?
それに、あれで治っていないのなら・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・これからそれ以上のものを教えてあげるだけです。」

満面の笑顔と共にそんなことを言う。

顔だけ見れば、悪意なんて微塵も感じ取れない。

が、数年前の教育2日目の朝、フランに会いたくないと訴えてきたエヴァンの顔を思えば、教育という名の元に何が行われているのか、疑いたくもなる。

「まあ、その件については、エヴァン本人に決めさせるという事でいいか？」
「じゃあ、それを伝えるときに、俺が今から言う事も一緒にいいですか」

そう聞き返すと、先を促された。

「別に拒否してもいいですが、拒否するということは、自分の愚かさを認識したということですので、これからクゥの悪口・・・・というか平民だからと人を卑下する言い方は止めてもらいます。
もし、またその事で、メイシャを泣かせるようなことがあれば・・・・・・・・その時は覚悟してください。安らかな眠りにつかせてあげますから・・・・・・・、と。」

最後の言葉は、本気の殺害予告だった。
それは、フランの顔や雰囲気は笑っているのに、目だけが笑ってい

ないことから分かる。

「わ・・分かった。そのままエヴァンに伝えよう。」

「よろしくお願いします。では。」

そう言って執務室から出ようとする前に、止められた。

「ところで・・・お前にも縁談が「全てお断りしてください。」・・・お前がそういうのなら・・・。

だが、お前ももう17歳。既に成人しているのだから、誰か良い相手を連れて来てはくれないか？」

それを聞いたフラウは

「俺は、誰かと付き合う気は全く無い。」

一言で言い切った。

敬語（？）になっていないのは、それだけ本気ということか・・・。

「要件はもうないようなので、それでは失礼します。」

そう言うと、フランは執務室を後にした。

残された当主は

「やはり、社交界に出すべきか・・・・。」

独り呟いた。

これが後後悩みの種になることを知らずに・・・・・・・・・。

＊＊＊

フランは自室に帰る途中、さっきの話について考える。

（結婚だと！？俺が！？

はっ、そんな人生で一番面倒な事誰がするかっ！！

結婚は人生の墓場っていう言葉を知らないのか！？

苦労すると分かっていて、結婚したいと思うわけないだろう！？

普通。

はぁ・・・。

ぐぅたら生きたいな・・・・。

１日中食っちゃ寝できたらどんなにイイだろう・・・・。）

とか、多分一生無理そうな、というかもしできても人間的にどうだろうという事を思いながら、廊下を寂しく歩いていった。

数日後、フラン（＋メイシャ＋エヴァン）は、なぜか王家主催の舞踏会にでる羽目になる。

当分フランの夢（？）は、叶いそうにない。

結婚は人生の墓場らしい。（後書き）

次の話を考えるのが楽しみです！！
暇つぶしどころでは終わらなさそう・・・・ついでに、フランも面倒事にいろいろ巻き込まれそうです（笑）

前言撤回・・・はできませんね。（前書き）

あんまり話進んでません・・・。
早く進めたいのに・・・。
あと、手紙の書き方は気にしないでください（泣）

前言撤回・・・はできませんね。

『ミラン・ブリス・アルフォード殿

先日は、アルフォード家に大変お世話になった。故にここに感謝を示す。

今後とも、我が国の発展に御助力願いたい。

さてこの度は、我が宮殿にて舞踏会を行う事になった。

我が娘、エレナの誕生パーティーでもあるため、献上品の持参を参加資格とする。

パーティーには、家族全員で出席するように。

ＰＳ：エレナの婿探しも兼ねているので、１５～１８歳の男児は、見栄えの良いよう着飾ってくるように。

ダグラス・ユーフェミア・レインゲート国王』

グシャッ

フランの父親、ミランの部屋で、紙を潰す音が聞こえた。

「ど、どうしたんだ？フラン。

国王からの大切な書簡をグシャグシャに丸めるなんて・・・・。」

今この部屋には、ミラン、エヴァン、メイシャ、フランの四人が集まっている。

理由は、上記のような国王からの書簡が届き、その舞踏会に出席する準備（服、献上品など）をさせるためだったはずだ。

この申し出は、フランを社交界に出そうと考えていた矢先のことだったので、ミランは丁度いいと思い、参加する旨を綴った書簡を既に出していた。

まあ息子・娘のあの容姿を、周りの糞貴族共に自慢してやりたいという気持ちも無かったわけではないが。

美味しい料理も沢山食べれるし、息子・娘の生涯の伴侶を探す場所にもなるだろうし、何より彼らが喜んで引き受けるだろうと、安直に考えていた。

そこで、準備のため数日前に息子たちに言ったのだが・・・・・・

長男と長女はとても嬉しそうなのだが・・・・・・

次男だけがとても不満そうだった。
書簡をゴミクズのように丸める、という行動で示すほどに・・・。

今も、何か言いたそうな顔をして、ミランを睨んでいる。
「どうしたんだ？」
「なぜ、俺が舞踏会なんて面倒な事に参加しないといけないのですか。」
そこには、静かな怒りがあった。
「国王からの命令だから、断れないだろう？」
「エヴァン兄さんとメイシャだけ連れて行けばいいでしょう・・・。」
「書簡には、家族全員でと書いてある。
もちろん、息子が二人だということは国王も知っている。」
「ならば、俺は病にかかって寝込んでいるとか言って欠席させてくれればいいのに・・・。」

「フランッ！！」

「！！」

いつまでもグダグダと文句を言っているフランに、ミランは声を張り上げた。

「これは私、ミラン・ブリス・アルフォードからの命令だ。」

今までとは違う、迫力のある声に圧倒され、フランは姿勢を正した。

「国王主催の舞踏会に参加せよ。」

「・・・・・・・はっ。」

少し間を空けたあと、静かに、偉大な父に対して敬礼をした。

それからはとても忙しかった。
新しい衣装を作るため採寸したり、どんな服にするか決めたり・・・。

一番時間がかかったのは、献上品を選ぶ事だった。
父様が、姫様には宝石がいいだろうという事で、宝石商を呼び寄せて選ぶことになったからだ。

（うわっ・・・なんか面倒なことになてきたなぁ・・・
今からさっきの返事取り消せないかなぁ～・・・）

そんなことを考えつつも献上品を選ぶ。

エヴァンは大きな翡翠のネックレス、メイシャはアメジストの指輪を既に選んでいた。

フランは、というと

（ど・ち・ら・に・し・よ・う・か・な・か・み・さ・ま・の・い・う・と・お・りっ！）

で黒真珠と琥珀で出来た髪飾りを選んだ。

＊＊＊

そんなこんな（？）で舞踏会当日。
快晴の中アルフォード一家は、王宮へ行くため馬車に乗った。

（あぁ～何か嫌な予感するんだけど・・・）

馬車は、そんな嫌な予兆を無視して走る。

憂鬱なフランの気持ちを乗せて――――。

前言撤回・・・はできませんね。（後書き）

はい！お父さんの本気には弱いフランでした（笑）
あと・・・フラン・・・女の子への贈り物を、それで選ばないで！！本気で。
ちなみに「どちらにしようかな――――」は地域で違うんですよね。
びっくりです。

さあ次回は、お姫様エレナ登場です！！
あれ？・・・この人ヒロイン候補？作者もわかりません（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2920ba/

俺の身代わり募集中。

2012年1月8日02時50分発行